

聖書:ルカの福音書21章20~38節

説教:贖いの日が近づいている

はじめに

いつものように前回のおさらいを簡単にします。イエスは終わりの日が近づけば、国と国は敵対し、戦争、暴動はもちろん、地震や疫病が起き、クリスチャンは迫害され、憎まれ、中には殺される人も出ると語ってから、けれども、あなたがたはすでに永遠のいのちの約束をいただいているのだから、しばらく忍耐するけれど最後にはその約束を手に入れなさいと教えました。聞けば聞くほどなんとも気の重くなるような話でしたが、よく見るとこれこそまさにイエスが歩まれた十字架の道そのもので、厳しいことばの中にイエスの恵みがあることを確認しました。

今日の箇所は終わりの日のことがもっと具体的に語られていて、これもまた心が暗くなるばかりです。どこに恵みがあるのか。ともに考えてまいります。

## 1 神の国が近い

### 1) エルサレム滅亡

20節。「しかし、エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、そのときには、その滅亡が近づいたことを悟りなさい。」ときどき「あと何年すれば世界の終わりがやってくる」というような話しをする人がいます。けれども終わりの日がいつであるかについては父なる神だけがご存じのことですので、私たちは絶対に知ることはできない。では、まったくわからないのかというと、そうではない。29節にあるように、木の葉が芽吹いて大きくなったら夏が近いことをだれもが知るように、エルサレムが軍隊に包囲され、踏み荒らされるようなことが起きたら、滅亡の日は近いとわかる。それがひとつのしるしとなる。でも、まだそのようなことは起きていませんから、いますぐにはなさそうです。

### 2) 天変地異が起こる

しるしはまだあります。25、26節。「それから、太陽と月と星にしるしが現れ、地上では海と波が荒れどよめいて、諸国の民が不安に陥って苦悩します人々は、この世界に起ころうとしていることを予測して、恐ろしさのあまり気を失います。天のもろもろの力が揺り動かされるからです。」空の天体に現れるしるしとはどのようなものかは分かり

ません。海と波がどよめいて、と聞けばすぐに津波のことや異常気象のことかと思ったりもします。もはや地球温暖化ではなく地球沸騰化と呼ばれるようになり、専門家たちはこれから食糧難や飢饉が増えることは確実だと予測しています。そのうち「恐ろしさのあまり気を失う」人がでてきてもおかしくありません。いずれにしても、これを読んで皆さんはなんとなく不安にはなると思うのですが、そのいっぽうで世の終わりはすぐに来るわけではなさそうだとひとまずは安心したかもしれない。

## 2 しかし、あなたがたは

### 1) よく気をつけなさい

そんな私たちにイエスは二つの注意を与えます。一つ目は34節後半です。「その日が罨のように、突然あなたがたに臨むことにならないように、よく気をつけなさい。」

いつも言うことですが、「気をつけなさい」と言われて気をつけられるのならだれも悩まない。気をつけていたつもりでも失敗してしまうものです。皆さんもいつも経験している。やはり精神論ということでしょうか。

### 2) いつも目を覚まして祈っていなさい

そして二つ目の注意は36節。「しかし、あなたがたは、必ず起こるこれらすべてのことから逃れて、人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈っていなさい。」

霊的に目を覚まし続けていなさいと言っているようですが、これだけではちょっと漠然としています。そこでイエスは理解を助けるためにヒントも与えてくれている。「必ずこるこれらすべてのことから逃れて、人のこの前に立つことができるように。」

かつて私もそうでしたが、この世の人たちの多くはこう考えています。「教会で「罪だ、救いだ」と言われて毎日しかめ面をして生きるなんてばかばかしい。何がおもしろいのか。それよりも、一度きりの人生なのだから、おいしいものを食べたり飲んだりして楽しく過ごしたほうがよいに決まっている。」もちろん、楽しい生活をしたいと思うのは間違いではない。私も楽しいことを考えます。ではそれだけが人生なのか、ということです。

### 3) その日は突然臨む

35節の、「その日は、全地の表に住むすべての人に突然臨むのです。」このことばに目を留めたいと思います。これは直接には、世界の終わりの日のことですが、それだけではなく、私たちがどのようにして死ぬかについても言っているのではないかと思うのです。

具体例を挙げるとわかりやすい。能登半島地震で被災された方の記事が新聞に載っているのを読みました。最初の地震が来た時、自分はたまたま外に出かけていた。家で留守を守っている妻の安否を確かめるためにすぐに電話をしたら、すぐに妻が出て「大丈夫だ」と話していた。ところがその電話の最中に二回目の地震が来たとき、会話が途切れてしまった。急いで自宅に駆けつけると家は一階部分が押し潰され、妻の名前を何度呼んでも返事がない。結局翌日に家の下から発見されたというのです。それを読んで、「その日、すべての人に突然臨む」とはまさにこのことかと思われました。

いつあなたのたましいが取り去られるのか。それはだれにもわからない。だからいつも自分の死について考えていなさい。それが、目を覚まして祈っていなさいということなのでしょう。

### 4) 人の子の前に立つ

でもなぜ祈るのでしょうか。どうせ死ぬのなら祈っても無駄ではないのか。そうではありません。「必ず起こるこれらすべてのことから逃れて、人の子の前に立つことができるように。」終わりの日、人の子は雲につつまれながら、偉大な力と栄光とともに再び来られ、そのときすべての人は主の前に立つこととなります。私たちは、まさにこの時に向けて歩んでいます。主の前に立つとき、イエスは言われる。「あなたの罪は赦されています。ですからわたしと一緒に天の御国に入りましょう。」そう言うてくださることを期待しながら、毎日を過ごします。

でもそのことは忘れ、あるいは考えなかったならどうなるか。その人は本当に生きていけると言えるのだろうか。33節に「天地は消え去ります」とあります。いま目で見ているこの世界は、どういふふうにかはわからないけれど、最後は消えていくことが定められています。そうしたらこの世の宝はすべて消えてなくなる。どんなにこの世の楽しい生活を追い求めても、結局は何も残らない。そう考えたら、こんな空しいことはない。私は若い時に

そのことに気がついて、生きることが空しくなってしまうことがあります。それでイエスは言ってくれる。だから、あなたがたは永遠に残るものを求めなさい。贖いの日が近いのだから、そのために今から目を覚まして祈っていなさい。

### 3 イエス・キリスト

1) なぜ「身重の女、乳飲み子を持つ女は哀れです」とイエスは言うのか

でも疑問が一つ残ります。23節。「それらの日、身重の女たちと乳飲み子を持つ女たちは哀れです。この地に大きな苦難があり、この民に御怒りが臨むからです。」

社会が不安定になれば、いつの時代も真っ先に最も弱い立場の人たちが被害を受けます。だったら神は、身重の母親、子を持つ母親たちをこそ真っ先に守ります、と言うべきではないか。それなのに、「あの人たちは哀れです」と言う。なんだか突き放されてしまった気分です。でも、そんなことはないはず。

### 2) 苦しみをともにされる

ではどういうことか。いつも言います。厳しいことばの中にイエス・キリストの恵みが隠されている。この原則でこの箇所をもう一度見ていきましょう。なぜイエスは、身重の女のことや乳飲み子を持つ女たちのことに触れるのか。都合が悪い話しなら、いつそのことしないほうがずっと得策です。でも、そんなことは人間の浅はかな知恵です。それに比べて神の知恵ははるかに深くて測り知れない。イエスが身重の女のことや乳飲み子を抱える母親の苦しみのことにわざわざ触れるのには、ちゃんとした理由がある。主は、母親たちがやがて直面していく苦しみを十字架で味わおうとしている。だから言える。自分だけどこか安全な高い所に立って、上から母親たちを見おろして「かわいそうだね」と言っているのでは決してない。

では、なぜ主は苦しみを背負われるのでしょうか。もっと違った方法をとることもできたのではと考えてしまいます。

### 3) 御怒りを受けられた

「この地に大きな苦難があり、この民に御怒りが臨むのです。」そこだけ切り取れば、どうして神はこんな理不尽な苦しみを与えるのかと疑問に思うだけ。でも話しは反対なのです。イエスの十字架とは何だったのか。私たちの罪の身代わりとなって、父なる神の御怒りを受けられた場所。それが

十字架です。確かに終わりの日、この地上のすべての人に神の御怒りがくだる。それは避けられない。けれども主はあらかじめ、十字架で御怒りを受けて下さっている。そのわたしを信じて、終わりの日に救われなさい。その日のことを覚えて目を覚まし、祈っていなさい。そうすれば必ずあなたは主の前に安心して立つことができるから。そう言うてくださっている。

それでも思うでしょうか。神が人を愛しておられるというのなら、人々が苦しまないようにしてほしい。そんなふうには言いたくなる気持ちはわかりますが、でもその前に思い出すべきです。私たちは神を裏切り、神を捨て、罪を犯してひどいことをしてきたのです。その罪の結果として環境が破壊され、人が人を殺し、堂々と真実がねじ曲げられ、嘘偽りがまかり通り、戦争が起きてもだれも止められない。そんな世界にしておきながら、神は不公平だ、残酷だと言っている。考えたらあべこべです。

それに対してイエスはどうですか。こんなひどいことをした私たちを見捨てません。わたしを信じて救われなさいと手を差し伸べて下さっている。終わりの日のことを考えるなら、私たちが救いの約束をいただいていることがどれほどに恵み安心できることなのかとつくづく思わされる。たとえ目の前に恐ろしいことが襲って来たとしても、私たち恐れなくてよい。そのとき、主が目の前に立って下さると約束されています。終わりの日、贖いの日が近いことを思い起こしつつ、この方を信じてこの一週間を歩んでまいります。